第三四回 研究のための基地としてのアジ研図書館

力田　萌瑞

私にとっての図書館とは、秘密基地のようなものだった。昔から私は足しげく図書館に通い、暇さえあれば本ばかり読んでいたように思う。飲食を忘れて一日中図書館に滞在していたことさえ少なくなかった。そこから得たものは少なくなかったが、ただ、それはどこまで行っても秘密基地であって、現実味をともなう実用施設としてのそれではなかった。

アジ研図書館を知ったのは、学部時代のゼミ見学の時だった。明るく開放的で居心地の良い空間はこれまでの図書館の印象を踏襲させたものの、私は、その蔵書、特に諸外国の様々な文献や資料の収蔵量とその多彩さに、これまで通ってきた図書館とは違う、専門分野を意識した施設だと感じた。

残念ながら、それから暫くはあまりアジ研図書館を利用する機会を得られず、そうした印象も頭の片隅に追いやられていたが、半年前に一週間半ほど、アジ研図書館に連日通う機会を得た。

現在、私は宇都宮大学大学院国際学研究科の修士課程に在籍しており、クウェート議会についての研究を行っている。その専攻の必修単位に、国際学臨地研究という科目が設定されている。これは、提出する修士論文に資する研究活動を、実施受入機関を選定し、実施するというものである。通常、研究対象地域に直接赴くなどしてアンケートの実施や文献収集を行うのだが、十分な成果を得られると見込まれている場合にはそれ以外の地域で実施することが認められている。

これを、研究対象地であるクウェートで行う代わりに、アジ研図書館にて実施させていただいた。アジ研図書館には、豊富な蔵書や論文による先行研究が蓄積されており、欠番こそあるものの、クウェートの新聞二紙をはじめとする現地に即した各種情報も資料として収蔵されている。

豊富な蔵書や資料のみならず、収蔵方法ひとつとっても、アジ研図書館は開架式書架が基本であり、資料の多くは実際に手にして眺めることができる。これだけの資料がほぼすべて自由にみることができるのは、アジ研図書館だけではないだろうか。開架式であることで資料を探しに書架をめぐっていると、関連する文献も同時に目に入る。しばしば、気になった資料をみているうちにわき道にそれてしまうこともあるが、思わぬ資料をみつけることもあった。

和書と一九九八年以降に受け入れられた洋書図書に関しては、通常の分類番号順ではなく、和書・洋書混合の地域別に配架されている。関心のある地域に関する図書を端からみていくことができるのは、アジ研図書館ならではの楽しさだ。

また、各地域の担当司書の方が、資料収集のレファレンスを行ってくれる点も心強かった。例えば、クウェートにおける主な法律の改正についてまとめられている資料や、それまで私の知らなかった各種データベースを紹介していただき、アラビア語資料の検索・収集についてもアドバイスをいただいた。本来ならば手探りで試行錯誤しなければならないところを、担当司書の方が相談にのってくれたことで、その後の研究を進めるきっかけを与えてくれた。何よりも、調べたい事柄が出てきたときに、各地の資料について知識を有する方が控えていてくれる、ということが心強く感じた。

アジ研図書館は、これまで私が馴染んできた図書館とはまた少し違った、学術的な問いかけと密接に結び付いている。そこでは施設全体が研究を支える拠点として機能しているようだ。

もちろん、図書館特有の〝居心地のよさ〟は昔も今も変わらない。けれどそれは、確かな専門性をともなうものとなって私を出迎えてくれるようになった。そう考え始めると、開放的な明るさまでも学問を支えるためのものとして意識して設計されているようにさえ感じられるのが不思議なもので、〝図書館〟という施設に対する意識や見方が大きく変わったように思う。

かつて、雑多で様々な知への入り口として秘密基地のように感じていた図書館は、アジ研図書館へ通いはじめてから知識を探求するための出発点になった。

私にとっての図書館は、研究のための拠点として、今もかわらず〝秘密基地〟であり続けてくれている。

（ちからだ　もえみ／宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程）